HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	心境報告
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	雷鳥時報, 2
Issue Date	1932-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77694
Type	article
File Information	A010_052S710_Part1.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

雷鳥時報

昭和七年十月 | 2 | 雷鳥倶樂部

友への便りにかえて

分部桃彦

H兄

度々山信ありがとう。小生の憧憬れる東北の山々に、思ふまゝ驥足を伸ばしてゐる兄が、羨ましくて仕方がない。小生は不相變秩父だ。秋深みゆくころ、靜思の山旅をつゞけたいと希つてゐる。

それはそうと、岐阜への書債は果したか。兄に限つて大丈夫と思ふが先生始めG君たちに、これ以上お世話を掛けても申譯あるまい。とは言ふたが實は小生、きのふ催促を食つたのだ。忝けなさに涙こぼれて、いざ書こうとすると中々名文がものせない。まゝよ迷文でも書き付けて申し開きをするつもりではある。活字に組まれやうが、プリントになろうが何も構つたことはない。讀んでくれるのはみんな同志の山男だ。

H兄

つくづく考へるよ。斯うした氣のおけない同志の集りを持つてゐる俺たちは幸福であるとよ。この考へは小生一人だけではあるまい。廣い世間のことだ、山を對象とした集りは鵜の糞ほどもあるであろうが、然しだ、それらの會はみんな違つた人種の集合體だ。だから精神的の結合など恐らくは出來つこはない。それ故バカにも面倒臭い規約を持つていたりすることが多いのだ。小生は何うも生れる前から規則だ蜂の頭だといふことが、嫌ひだつたチクサンよりまだキライだ。なぜもつとあつさりゆかないものか。例へば俺たちのクラブのやうに。こんな氣持のよい集りを持つてゐる俺たちは、それだけでさえ矜持を持つてよいよ。いつか登高行で、逝くなつた大島さんが、「登高會は山岳部を出た先輩の會である。だから山岳部の延長である。山岳部を出たといふことは學校を卒業してしまつたからであるが、山岳部で深い人生の教育をされたことを思ふと、今更ら懐しい。山岳部への思慕、お互の友情、斯うしたものが登高會を育んだのだ。」と言ふやうなことを書かれて居つたのを記憶してゐる。俺たちのクラブもそれとちつとも違はない理由のもとに生れたのではないか。

H兄

學生生活は人生の花だなんて今更言ふだけ野暮だが、親父のスネを齧りながら何んの屈托もなく食つたり遊んだり、そしてちよつぴり勉強して——俺は違ふとは言はせないよ——後は大概山のことばつかり考へて多くの夢をみていた當年の憶ひ出、今考へると可笑しくなるほど朗らかだな。例へアルプスやヒマラヤへは行けなくつても　この時から行けないと定めてゐたゞけは殊勝だ——千鳥のはて位は行つてみたいなんて言ひ合つたり、兎に角若い胸に惜しげもなく純情の炎を燃えたゝせて、それでゐて恐ろしく眞劍だつたあの當時の氣持、今から思ふとぐつと抱きしめたい程懐しいよ。

H兄

數多い學校の中で最後の學生々活を母校に送つたことを今は幸福に思つてゐる。しかし申譯けないことではあるが、母校のルームからはアグリカルチュアのアウトラインすらも摑み得なかつたことを告白する。お前が言はなくても俺が證明してやるとはヒドイよ。そのかわりおぼろげながらも山を識り得た。山を識つた日は小生にとつて第二のバアスデイだ。

H兄

小生は今になつて、山に奉仕した時間を、——山に送つた時間といふ意味ではなくて山を憶ひつゞけたその時間までも含めて——考へてみることがあるが、そして山登りが自分のスポートであつたのか、それとも趣味、或はたゞ考へもなく貴重な時間を浪費してゐたのかと。しかしその時心の一隅から強くシッタするものがある。"若しもお前が、山を識る日がなかつたとして、その結果から考へてみろ"鐵槌がガーンと腦天を打ちのめす。實際山を識つた日は人生への甦生だ。いま小生は山を心から有り難く思つてゐると共に、山を識らしめてくれた母校の山岳部、山友たちに衷心感謝してゐる次第だ。

H兄

益々もつてクラブが可愛いくなるよ。それにしても俺たち同志はお互に一面識すらないものが多いのはさみしいことだ。しかしそんなことは一面また何うでもいゝことになる。俺たちはたゞ顔を見識つてゐるといふものだけの集りではなく、もつともつと深い精神的の連鎖によつて、このクラブを組織してゐることを自覺するのがより重大であると思ふ。

H兄

何んだか長つたらしく書いてしまつた。自分ながら何を言ふてきたのかさつぱりわからないが、要するに長い人生の行路に、お互に山といふゆるぎなき巨人の朗らかな精神の風に接して活きてゆくことを希はうではないか。

初秋の夜は靜かに更けてゆく、では又健在を祈るベルグハイル。

心境報告

鈴木榮太郎

（一）

伊吹に雪のかゝる日が復た近づいた樣だ。毎年晩秋初冬の交の或る一夜の中に伊吹の頂上は俄かに眞白くなる。其翌朝それを眺め見た時程私は一年が又廻つて來たと思はされる時はない。自然の季節の移り變りは大抵少しづゝ變化して行くものである。綠色の增して行く春の來復も黄色の加はつて行く秋の到來もいつもそれは〳〵用心深くほんの少しづゝである。だが伊吹の頂上は一夜の中に卒然として白くなる。私は伊吹に雪のかゝる日をもう何度迎へたらうそれは大抵いつも朝電車の停留場に急いで行く途中鐵道の上の陸橋か

らである。私がいつも伊吹の初雪を見て驚くのは、それを見た瞬間いつも私ははたと胸を打たれた様な氣持ちになる。

「又來やがつた」

私はいつもさう思はず聲を出す。私はなぜその時そんなに驚くのか。それ程身にしみて感じながら私自身にもなぜだか其譯がよく分らないのである。

よく風邪を引く冬の到來の豫告に驚くのか。成す事もなくして一箇年が又一巡した事を見せつけられて恥づる心か、そんな譯でもない様だ。どうもはつきり分らぬが、思ふに去年や一昨年と全く同じ様に又頂上が一夜にして白くなつた事其丈で悲しいのらしい。つまり單調な繰り返しがかなしいのだ。同じ様に陸橋の上から同じ様な季節に同じ様な時刻に同じ様な變化を見るのがたへがたいのだ。

誰れでもこんな感じがあるものかしら。さう云つて思ひ出したが、私の或る長友がこんな句を詠んだ事がある。

「倒れ松はつと驚く刹那かな」

同じ様な心境ぢやないかと思ふ。

（二）

僕はこの頃よく旅行に出掛ける。去年の初冬には東北に行つたし、今年の二月頃には大和、紀伊方面に、それから夏には出雲に行つた。調査の爲の旅行ではあるが、忙しい中にも旅を味はふ事をつとめて居る。旅は二重に人生を玩味する事が出來る様だから。

知らぬ村の旅舍の二階から朝數分間眺め入る四方の景色の心地よさ。秋田や青森の家屋には部屋毎に炬燵が切つてあつた。私はどんなにそれをよろこんだ事か。

私はよく山村に行く。それは私の調査の理論上からそれが必要でもあるが、私の趣味からも出來るなら山村を見たいのである。人事に餘り興味を持ち得ぬ私は目付きの惡い人の集まつて居る都會はきらひである。然し又全然人里はなれた山の上なども私には寂しすぎる様に思はれる。結局山村位が一番いゝ事になる。云はゞ人と自然のとけ合つて居るあたりである。どうも悟りがたりぬと見えて人間に對する愛着は何としても絶ち得ないのである。只妙にいがみ合の事にばかり興味を持つて居る人間がきらいな丈である。

然し更に思ひを廻らして考へると山村は人が自然を克服する爲に餘りにいらだつて居る様にも思はれる。

丁度都會で人が人を克服する爲にいらだつて居る様に、そのどつちにも何となく落ちつきがない。だから自分の安住の地としては都會と山村の中間あたりがよい事になる。山村では川の水は奔流に泡立つて居るがそれが第一落ちつきがない。山村は云はゞ古梅の感じだ。私がすきなのは桃の里と云ふ様な感じのところである。川の水が少しばかりゆるやかになつて鮒でも居さうなところが柳の木の下にある様なところ。思つた丈でも心がおどる様である。私がもつと悟つて居るなら何もかもかなぐりすてゝそんな所に移るのだがと思はぬでもない。

實驗室漫談

平吉功

今朝出町の書店でヒヨツト眼についたのが「山と旅」。毎朝教室へ出掛ける途中、出町交叉點で電車を待つ暇潰しに眼新しい本もがなと店頭を覗くのが例になつてゐる。「山と旅」と言へば隨分聞き古した名前だが、何とか言ふ天幕商會の宣傳雜誌位ゐにしか自分の頭に殘つてゐない。從つて之迄餘り注意して讀んだ事も無いが、此頃では立派に月刊雜誌として一人前になつてゐるらしい。表紙には山岳隨筆特輯と銘打つてある。パラリと開いて目次に眼をやると、例の如くオエライ様の名文がズラリと並んでゐる。烏水、徹藏、重治、九三、松次郎等々々。中に「昔戀しい草鞋の話」と言ふ表題が見附かつた。此奴面白い。わらぢと言ふ字にも妙に惹附けられて早速買つて來た。元老高野鷹藏氏の筆であるが、わらぢの語源から始つて輕妙の筆を以て誌された憶出の記である。武田久吉博士が且つてわらぢの愛用家なりしこと。一山にわらぢ八十九足を擔ぎ出したの、九大の鹿子木博士が靴での穗高縱走の初めだの、微笑み乍ら讀了した。ほんとに此頃の若いアルピニスト達はわらぢを見下げ過ぎてはゐないだらうか？　歐洲アルプスに發して其處で成長した鋲靴をそのまゝ移入して、それ丈けが日本の新しい意味の登山に於ける唯一の道具であるとする見方は確かに反省の餘地があると思ふ。現に私達の貧しい體驗からのみでも、一昨年の谷川岳、昨年のカクネ里入り、共にわらぢの併用さへ實行してゐたら、どれ丈け行程を短縮し得たか知れない。更にそれの材料であるワラは今日では殆んど過去の遺物として退歩的な農村に於て辛じて生命を繋いでゐる觀があるが、その物理學的又化學的性質がシツカリ把握された曉には、彼の七千米のヒマラヤンゾーンに於いてワラが活躍する時が來ないとは斷言出來ない。既にヒマラヤ遠征の歐洲人に依つてワラが使用された事が有る由を或る人から聞いた事がある。

近頃と言つても、もう大分以前からかも知れない——山の雜誌が隨分出來た様だ。自分の知つてゐる範圍でも山と溪谷、アルピニズム、山小舍、山と旅、等々々。之でよく皆が採算が取れて行くものだと、人事乍ら氣になつた事もある。一々眼を通したい希望は持つてゐるが、暇と金が言ふ事を聞かない。書店で目次を覗くか人の奴を一寸失敬して拾ひ讀みする位ゐが落ちだ。が今度の「山と旅」不思議に念入りに讀んだ。斷つて置くが、私は此の雜誌の提灯持ちをする氣は無いんだから。客觀的に見て此雜誌が特に内容が勝れてゐた譯では無いんだらう。恐らく最近實踐に充されない自分の山を求める心が然ふさせたのだらう。然ふ言へば此頃の自分はスツカリ山に飢えてゐる。憶ひ出せば去年の秋、何かと言ふと妙にセンチめいて來るが、自分にはそれ程長い期間の様に思へるその年の秋のカクネ里入りを最後に山にはフツツリと別れてゐる自分である。お正月の冬山は卒業論文に引掛つて涙を呑んで思切り、教室の硝子窓を搖ぶる粉雪混りの北風に高鳴る胸を抑えて、スキー場歸りの人達を羨しそうに見送らねばならない身の辛さ。三月こそはと大いに意氣込んでゐたのに、能郷白山のたつた一日の滑り初めの滑り納めでお仕舞ひ以來今日迄教室から一歩も出ずに我乍ら感心する程のしほらしさ。そんな事とは御存知ない人様の普通の御挨拶が妙に戀しく聞かれた事も有つたつけ。抑々何が彼を然ふさせたか？　と聞き直つて考へて見るが、結局俺の仕事が忙しいんだね、と言つても眞實にしない人の方が諸兄の間には多からうと思ふと少々情無くもなる。「君は一體教室で何をしてゐるのか？」とよく人様から質問を受けるので、一寸此邊でお答へしときませう。私の仕事は植物のエロの探賞であります。つまりホツプとカナムグラの性染色體と言ふ奴を覗いてゐるんです。レンズを通してね。御心配無用、風俗紊亂の惧れは決してございませんから。今一つは稻作りです、が之が又餘り感心した奴で無いんでしてね。籾を作つて喜んでゐる